

第82号

平成8年7月

E-mail: © 1996

shimz@mb.infoweb.or.jp

LDG04167@niftyserve.or.jp

編集発行人

清水吉男

(株)システムクリエイツ

横浜市緑区中山町 869-9

電話 045-933-0379

FAX 045-931-9202

プロジェクト管理



工程計画【12】

5.4 消極的な言葉を浮かべない

人の行動は、頭に浮かべる「言葉」に強く影響を受けます。その意味では「失敗すると思うプロジェクトは失敗する」というマーフィーの法則は正しいと言えます。

必要なのは成功のシナリオなのです。最近ではスポーツ選手にも「イメージトレーニング」というものが盛んに取り入れられています。これは「成功」をイメージする訓練です。3時間後に自分が先頭を走っている場面を想像しているのです。そして人垣のずっと向こうにある一本の白いゴールテープを最初に切る姿を想像しているのです。スポーツではこれが大変効果があることは、既に実証されているところでもあります。

効果があるのはスポーツの世界だけではなく、非常に困難な局面に置かれても、人は誰でも「何とか方法があるはずだ」という言葉を浮かべることで、「βエンドルフィン」が分泌され、それが脳を刺激し、シナプス間の電流が流れやすくなって、ヒントが浮かんでくるものです。このメカニズムは体内ホルモンの分泌の研究からも証明されています。(参考:「脳内革命」)

逆に、少しでも消極的な言葉を浮かべれば、ピタッと思わはそこです止まってしまいます。「出来ない理由の杭」の前で、止まってしまふのです。その30cm横に擦り抜けるすき間があっても、もはや彼には杭しか見えないのです。大事なことは積極的な言葉しか浮かべないということです。詳細スケジュール管理も、積極的な姿勢がなければ、殆ど何も手に入れることは出来ません。



5.5 「自分だけでも出来ること」

この種の取組みでもう一つ重要なことは、“自分だけで出来ること”と、“自分だけでは出来ないこと”をしっかりと見極めることです。詳細スケジュール管理は、現実には幾つかの困難に遭遇します。そのためにたいの人は、この種の取組みを安易に自分だけでは出来ないことにしてしまいがちです。

有名な神戸製鋼のラグビー部の練習時間は、週に2回で、しかも1回が2時間と決まっています。つまり、ラグビーの練習で“自分一人では出来ないこと”は、何と何ということが明らかにされていて、それ以外は全て自分だけできっちりトレーニングをやっている、週に2回の全員の練習ではチームとしての練習だけをやってきたのです。あの偉大な7連覇はそんな中で達成できたのです。

同じことが、スケジュール管理の取組みにも言えます。確かにチームや組織単位でないと出来ないことはありますが、自分だけでどんどん取組めることは沢山あるのです。そして、この取組みに成功するかどうかは、このような姿勢を

持っているかどうかで決まると言っても過言ではないのです。実際問題として、新しいプログラム言語を修得する方法は、適切なセミナーの受講の後は、自分で参考書のページを開いて実際にパソコンに打ち込んでやってみることです。ここでは誰もが「必要なのはトレーニング」であるということを確認しています。

詳細スケジュール管理も、実はこれと殆ど変わらないのです。毎日、コンピュータ言語に触れているように、詳細スケジュール管理も毎日触れていれば、上手く出来るようになるのですが、プログラム言語と違って、それがなければ仕事にならないようなものではないのです(と錯覚してしまうのです)。



5.6 適切な指導

このように、厳格な詳細スケジュール管理を実施することは、確かに易しいことではありません。その難しさの殆どは、スケジュールの書き方とか、設定作業の大きさといった、いわゆるテクニカルな部分ではなく、本人の意識の置き所といったメンタルな部分に於いて発生します。詳細スケジュール管理が上手くいくかどうかは、受け身の状態で脱却できるかどうかにかかっています。「随所に主となれば立地皆真なり」とは臨済録にある言葉ですが、この取組みで自らの「思考の川」に自在に水を流すことが出来るようになった人は、この臨済録の言葉を説明無しに理解します。つまり体でこの言葉を理解するのです。

このくらいのスケジュール管理になれば、テクニカルなスキルだけでは実現しません。幾ら沢

山のテクニカルな条項を覚えても、現実には“アナログ”であり、デジタルな条項の隙間をカバーしきれものではありません。

また、詳細スケジュール管理の取り組みは、ある意味では「自己との戦い」ということも言えるほどです。その時どのような心理が働いたのか、彼の意識は何処にあるのかといったところが見えなければ、なかなか指導できるものではありません。



プロジェクトを完成させるのは、設計手法でもなければクリーンルーム手法のような開発手法でもありません。勿論それらは有効な手段であることは間違いありませんが、プロジェクトが管理され、スケジュールが厳密に制御されなければ、それらの手法の持つ効用も活かされることはありません。

残念ながら、ソフトウェア開発の世界では、華やかな設計手法や開発手法は注目されるのですが、「スケジュール管理」なんて言葉を聞くと、まるで油に汚れた世界を想像してしまうのでしょうか。自分達の方が余程「3K」的な仕事の仕方になっているというのに。

SEIのワッツ・ハンフリー氏は、最近「PSP (Personal Software Process)」という取り組みを始めています。組織のプロセスを改善するために、まず個人のプロセスレベルを改善しようというのです。そしてプロセスのレベル1から2に引き上げるための取り組みを、個人に対して行っているのです。適当なプログラムの開発をテーマとして、その工数を見積り、それに向かって作業をし、そしてどれだけ上手く出来たか検証するのです。

一人ひとりが自分の作業を「約束」出来ないかぎり、組織のプロセスを改善することは出来ません。

(完) m(._.)m

包括的核拡散防止条約 (CTBT) 締結の意味



▲昨年、フランスが核実験を実施した目的は、“コンピュータ・シミュレーションに必要なデータの収集”であった。そして必要なデータを手に入れたということで実験は中止された。今では実際に爆発させなくてもコンピュータ・シミュレーションによって、“核実験”は可能だという、新型の核兵器の開発もコンピュータ・シミュレーションで出来るというから、ある意味ではスゴイ時代である。

▲アメリカやロシア(旧ソ連)は既にこのコンピュータ・シミュレーションの技術を手に入れている。フランスも世界を敵に回して大急ぎで手に入れたし、イスラエルはアメリカとの技術交換で手に入れる模様だ。中国もどうやら目処を付けたロシアからの技術支援を確保した模様である。最近ではアメリカと駆け引きしながら、ロシアやヨーロッパ諸国と積極的に接触しているのもさな臭い。これに対してインドやパキスタンは、未だこのコンピュータ・シミュレーション技術を手に入れていない。

▲今年の秋を目指して包括的核拡散防止条約、いわゆるCTBTの締結に向かって、各国の調整が行われている。フランスや中国の核実験はこのための駆け込み実験である。そして、主要国?は概ねコンピュータ・シミュレーションに必要なデータを手に入れたことで、やっと核実験の禁止が合意されると思ったら、今度はインドがCTBTに反対を表明した。

▲国家間の平和条約も実際の戦争の防止には役に立たないように、CTBTの締結も、それが結ばれても何も困らないから結んでもいいよ、と言うのである。実験しなくても核兵器が作れる方法を手に入れたから、CTBTに合意したのである。所詮、国家間の条約というもののはこんなものである。だがコンピュータ・シミュレーション技術を手に入れないインドは、それでは今持っている核兵器が陳腐化してしまう。そしてインドがCTBTに反対すれば、対抗上パキスタンは同じ行動を取らざるを得ない。開発・保有を公表していない国は、じっと息を潜めて成り行きを見ている。CTBT締結も額面通りには受け取れない。